名古屋市立大学病院
地域連携通信
CHIIKI RENKEI TSUSHIN
2026/01
Vol. 30

名古屋市立大学病院
NAGOYA CITY UNIVERSITY HOSPITAL
地域医療連携センター
TEL 052-851-5511 (代表)
TEL 052-858-7131 (直通)

先進救急災害医学講座・救命救急センター長 就任のごあいさつ

名古屋市立大学 先進救急災害医学講座 主任教授
名古屋市立大学病院 救命救急センター長
ふなこし ひらく
船越 拓

このたび、名古屋市立大学大学院医学研究科 先進救急災害医学講座を担当するとともに、名古屋市立大学病院 救命救急センター長を拝命いたしました。伝統ある名古屋市立大学の一員として救急・集中治療ならびに災害医療の分野を担う機会を頂き、身に余る光栄とともに、その責任の重さを痛感しております。

私は2005年に千葉大学医学部を卒業後、救急・集中治療領域のみならず、総合内科や放射線科などの研鑽を通して救命救急センターを中心とした急性期医療の現場で、多発外傷、重症敗血症、心肺蘇生後症例、災害・多数傷病者対応など、多様かつ重篤な症例に向き合ってきました。また、救急医療体制の整備や医療者教育、データに基づく救急医療の質向上にも取り組み、「必要なときに必要な場所で適切な救急医療が受けられる体制づくり」を自らのライフワークと考えて歩んでまいりました。

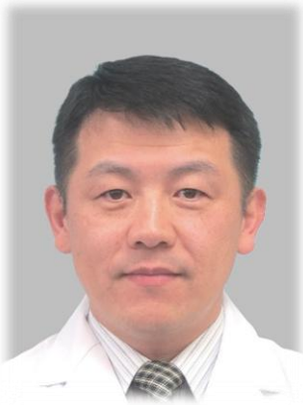
名古屋市立大学病院では、2026年に新たに救急災害医療センターの開棟を予定しております。高度な救急診療機能と災害対応機能を一体的に備えたセンターとして、救急外来、救命救急センター、集中治療、各専門診療科がこれまで以上に密接に連携し、地域の救急・災害医療のハブとしての中心的な役割を果たしていくことを目指しております。救急搬送件数の増加や高齢化、患者ニーズの多様化が進むなかで、限られた資源を有効に活用しながら、重症から中等症まで地域の救急のニーズを適切に集約し、「地域のニーズに常に応えられる救急」を実現できるよう、組織づくりと体制整備を進めてまいります。

救急災害医療センター 完成イメージ

そのためには、病院内の連携はもとより、地域の先生方との協働が何より重要と考えております。一次・二次医療機関、診療所、在宅医療、リハビリテーション施設、さらには消防・行政との連携を強化し、長期的な視点に立った「地域ぐるみの救急医療体制」を構築していきたいと考えております。救急災害医療センターが、地域の皆さまにとって「いつでも頼れる医療機関」であり、先生方にとっては「常に紹介し困りごとを解してくれるパートナー」となれるよう、教室・センター一同、診療の質向上と人材育成に全力で取り組む所存です。

未筆となりましたが、これまで本学救命救急センターを支えてくださったすべての関係者の皆さまに深く感謝申し上げるとともに、今後とも変わらぬご指導とご鞭撻、ご高配を賜りますようお願い申し上げます。地域でお困りの患者さんがいらっしゃいましたら、引き続き名古屋市立大学病院救命救急センターへご紹介いただけましたら幸いに存じます。

発症前の状態を取り戻す医療をめざして
～全身を診る視点と先進治療で支えるリウマチ・膠原病内科の診療～



リウマチ・膠原病内科　准教授　難波（なにわ） 大夫（たいお）

多臓器を総合的に診る専門内科

リウマチ・膠原病内科は、関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、血管炎症候群、炎症性筋疾患など、多臓器におよぶ免疫異常疾患を専門としています。
膠原病は、関節や筋肉に限らず、皮膚・肺・腎・神経と炎症が波及し得るため、全身を俯瞰した診断が必要です。当科では院内各診療科と密に連携し、患者さんを全人的に支える医療を実践しています。

寛解導入療法 － 発症前の状態に近づけるための早期集中治療

近年、生物学的製剤やJAK阻害薬などの分子標的治療の登場により、治療選択肢は大きく広がっています。炎症をできるだけ早期に抑えることが、発症前に近い身体機能を取り戻すための鍵となります。私たちは「treat-to-target」の考え方に基づき、早期寛解の達成を重視しています。

また、グルココルチコイドなど長期使用の副作用が問題となる薬剤は、必要十分量を短期間で併用し、効果/副作用・コスト比の最適化を図っています。寛解達成の遅れは、本来回復可能であった身体・臓器機能の障害につながる危険性があります。このため、症状から疑った時点での**「発症早期でのご紹介」**をお願いできれば幸いです。

寛解維持療法 － 副作用と治療コストを抑えながら安定を保つ医療

維持療法では、副作用や医療費を抑えつつ、より少ない薬剤で安定した状態を保つことが重要です。**当院では寛解導入後、最小限の維持療法へ移行し、その後は地域医療機関への引継ぎや併診を通じ、先生方の薬剤調整・副作用マネジメントの負担を最小化するよう配慮しています。**

治療開発がまだ進行中の疾患への取り組み

一方で、全身性強皮症など治療薬開発が不十分な疾患も存在します。これらの疾患では、既存治療を最適化し、病勢を正確に把握しながら、臓器障害を最小限に抑えるよう努めています。当科では、国内外の臨床研究・治験にも積極的に参画し、「可能な限り発症前の状態に速やかに近づける治療」の実現に向けた基盤づくりを進めています。

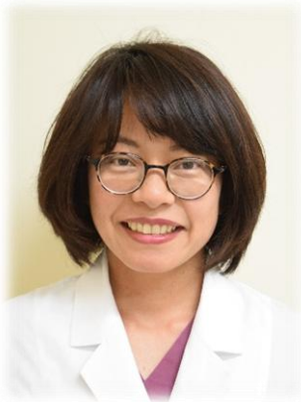
地域と大学が循環し、患者さんをともに支える体制へ

私たちは本院をハブとし、名古屋市立医学部附属病院群など複数の地域基幹病院に専門医を派遣し、患者さんが「遠くに行かなくても安心して治療が続けられる」医療環境を築くべく、基幹病院間の連携や地域基幹病院と近隣病院やクリニックとの循環型医療連携に努めています。今後も、膠原病を発症した患者さんが「発症前の状態に戻る」ことを実現するため、診療・教育・臨床研究を通じ、地域全体の膠原病診療の質向上に貢献してまいります。

お問い合わせ・ご相談は　名古屋市立大学病院リウマチ・膠原病内科（地域連携室）までお気軽にご連絡ください。

「すべての痛みに、寄り添う」地域の拠点として

いたみセンター　助教　加藤（かとう） 利奈（りな）



名古屋市立大学病院いたみセンターは、急性痛から慢性痛まで、年齢や原因を問わず幅広い痛みの患者さんを対象に診療を行う専門拠点です。2017年に開設以降、これまで地域医療機関に支えられ、9年間の臨床実績があります。

多職種チーム医療 － 心と身体、両面からのアプローチ

当センターの強みは、多職種によるチーム医療です。麻酔科医、看護師、公認心理師、理学療法士、作業療法士が協働し、痛みの原因を多角的に分析しています。痛みを神経・筋・骨格などの身体的要因だけではなく、日常生活での姿勢・動作などの生活習慣や、心理・社会的ストレスなどを総合的に評価し、それぞれに適した治療や支援を提供しています。 治療手段は多岐にわたり、ペインクリニックの診療技術を活かした薬物療法、神経ブロック療法中心に、心理療法、理学療法、作業療法を取り入れています。また、大学病院のメリットを活用し、他診療科専門医への紹介・連携も行っております。

小児慢性痛診療の開設 － 子どもたちの「見えない苦しみ」に向き合う

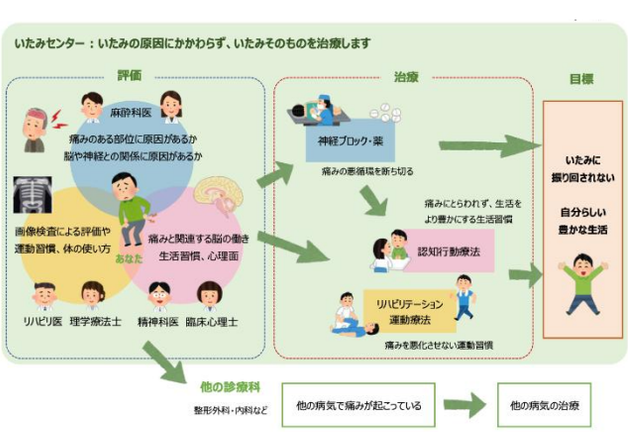
当センターでは小児慢性痛の専門外来を2025年春から新たに開始しました。これは、痛みを抱える子どもやそのご家族に対して、年齢に応じたきめ細やかな医療支援を提供するための取り組みです。子どもの慢性痛は、大人の痛みとは性質が異なり、身体的な痛みに、親子関係や学校での友人や先生との関係など、心理・社会的な要因がより深く関係しています。しかし、大人と違い未熟であるため、言葉での表出が困難であったり、子ども自身も何にストレスを感じているのかわかっていなかったりと、痛みの背景が見えにくいこともあります。多職種での診療により、謎が溶け、学校側との調整や心理的サポートで学校復帰に至った症例も経験しています。

このように、当センターでは子どもたちの複雑で多面的な痛みに対しても、柔軟かつ丁寧な診療が行えるよう診療体制を整えております。

地域との連携 －「継続できる痛み治療」の実現

当センターは、地域の医療機関との連携を重視しております。とりわけ慢性痛は、継続的な支援が必要であり、地域医療機関との連携による「つなぐ医療」が、患者様のQOL（生活の質）の改善につながると考え、継続できる痛み治療の実現を目指しております。

当センターは今後とも、地域の皆さまと連携し、よりよい痛み診療の提供に努めてまいります。お困りの症例がございましたら、ぜひご紹介下さい。



新生児から成人まで、先天性泌尿器疾患に寄り添う専門診療科として

小児泌尿器科　講師　西尾（にしお） 英紀（ひでのり）

名古屋市立大学病院 小児泌尿器科は、小児期からAYA世代さらに成人期までの腎・尿路・生殖器の先天性疾患に対する診療を行っています。地域の先生方に安心してご紹介いただけるよう、“安全な医療”を大切にしながら、患者さんにとって丁寧で分かりやすい診療を心がけています。

診療の対象は、停留精巣、陰嚢水腫などのよく経験する疾患から、精巣捻転、病的包茎などの救急疾患、尿道下裂、性分化疾患や総排泄腔疾患などの高度な治療が必要な症例まで幅広く対応しています。さらに腎尿路系の先天性疾患の代表である膀胱尿管逆流や水腎症に対する再建手術では、腹腔鏡手術やダビンチによるロボット手術を日本で初めて導入しています。小児手術の特性に精通したチームで、低侵襲な手術治療を目指しています。

また当院には、小児科、小児外科、小児整形外科など、小児医療に関わる複数の診療科がそろっています。泌尿器疾患以外の先天性疾患を合併している場合にも、院内の専門科と連携しながら、総合的に診療を進めることができます。より多くの地域の先生方からのご要望にお応えできるように、東部・西部医療センターに小児泌尿器科専門外来を開設し、病院群として連携した診療を展開しております。三河地方や、三重県、岐阜県からのご紹介の患児についても、蒲郡市民病院、安城更生病院、海南病院などの泌尿器科の小児泌尿器科専門医と連携をとって、術後のケアなどをお願いしています。

当院小児泌尿器科の西尾（前列左端）・水野（その右）と県内のチームメンバー

さらに、当科は研究活動にも力を入れており、学会のガイドライン作成に携わる機会もいただいております。最新の知見を日々の診療に生かしながら、患児とそのご家族にとって最良の医療を提供できるよう努力しています。

小児泌尿器疾患に関して、「少し気になる」「念のため専門の意見を聞きたい」といった段階でも、どうぞお気軽にご紹介ください。地域の先生方と一緒に、子どもたちの健やかな成長を支える医療を目指して参ります。

病院からのお知らせ

――― 救急災害医療センター開棟準備に伴う診療制限について ―――

平素より当院の診療体制に格別のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、2026年6月1日に開棟予定の「救急災害医療センター」の移転準備および設備更新作業に伴い、開棟前の一定期間において、一部診療機能を縮小させていただくこととなりました。

具体的な制限内容および期間につきましては、現在最終調整中であり、確定次第あらためてご案内申し上げます。

地域医療連携センターの移転準備および設備更新作業に伴う、開棟前の一定期間における一部診療機能の縮小について、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。